特116
705

第六天
士蟲
舍利
小鍛冶
石橋

九

始

宗家觀古

特116
705

# 第六天

概説　外九巻ノ一

解脱上人、伊勢國度會の宮に參りけるに、里人出で來りて神宮の此地に御鎮座あり、來歴を語り聞かせたる後、是れ神の告なり、又御身に佛法の障碍あれば、夢中に來りて其由を語らんと言ひて姿を隱しぬ。上人神前に詣で心を澄ますに、空は冴えながら風雨雷電頻に至りて奇異なる光景を呈しけるよと見れば、佛法を破却する第六天の魔王とは我事なりと叫びつゝ、種々の惡魔を從へて魔王現れけるより上人は合掌して觀念しけるに、素盞嗚尊現れ給ひ、魔王等を悉く攘ひ除け給ひけり。

大正
9.10.15
内交

此曲淀ミナクサラリト後ハ手強クスラリト謡フベシ

| 役別 | | 装束附 | |
|---|---|---|---|
| ワキ | 解脱上人 | 角帽子　着附小格子　白大口　水衣　袴緒　厳子腰帯　珠数　扇 | |
| ワキツレ | 従僧二人 | 角帽子　着附無地殿斗目　白大口　水衣　腰帯　扇　珠数 | |
| 前ツレ | 女 | 面達面　髪　髪帯　着附櫛箱　唐織着流　髪扇 | |
| 前シテ | 女 | 面増　髪　髪帯　着附櫛箱　唐織着流　髪扇 | |
| 後シテ | 第六天魔王 | 面大癒見　色鉢巻　赤頭　着附厚板　半切　狩衣又ハ法被ニモ　腰帯　魔王團扇 | |
| 後ツレ | 素盞嗚尊 | 面天神　金紗鉢巻　黒垂　輪冠　着附厚板　白大口　側次　腰帯　剣佩ク　打杖持 | |

| 季 | 所 | 曲柄 | 能 |
|---|---|---|---|
| 三月 | 伊勢國勢田山治守宮外市 | 賀吉順 | 切能(五番目)累脇能 |
| | | 級 | 五 |

作者不詳

第六天

ワキ僧
ワキツレ天僧
次オ上
柏子ニ合

心の花をとゑ向て。心の花を手向
て。お神宮に参らん　日月ニ明カニ
解脱とゝすれば門にてゆ。われ未だ
お神宮に参らずゆ狂ひて。この度
思ひ立ち伊勢に参宮し志し作
道行三人上
振袖。けふ九重をと立ち出でゝけふ

九重と立ち出でて。東の音羽の山桜花の滝川それその。行くも帰るも逢坂の。板の木の間に波寄する。

（シテ女二人上用カニ 真ノ一声 柏子香八ベ）

湖むかしを偲べば。やうやう行けば鈴鹿路や。多賀の氣の郡の社。もあく慶會の宮。で。まきてけり慶會の宮にまきてけり。

神路山。市堂瀧川のその上にて。契り事の。東の違つゝ。永き代までも。仕へ来て。盡きぬ惠は。頼もしや。

（シテサシ上用カニ）

忍度せば。木もゆかずかたそぎも。反らず。二人直捨方便の形を顕すかゝ。忍ぶ。古松枝とたれ。老樹緑を添へ。皆これ上求菩提の相を表す。有難かりし。宮居かな。

○小説 柏子三合

神風に心安くぞ任せつる。桜の宮の花盛。桜の宮の花盛。花の白雲立ち迷ひ空さへ匂ふ月。讀の実

俄り来る影も長閑にて。知るも知らぬも道の邊の。行きかふ袖の花の香に春一入の。氣色かな。実一入の氣色かな。

それある御僧の何處



よりの御事論ってはぞ。それの郎

方より出でたる御門にてはや。和光同

塵の本誓の結縁の始。濁世の我

らなんぞ邪力の妙楽と蒙らざ

らんや。神秘を委しく語り給へ

シテ 優しき人のいひ事や。惡に語り来

らせうずるにて。それ地上に立て

○サヽ曲獨吟

「いつぺ。優姫の命。七百余歳にまで。宮居とこそ。尋ねおつります。」

れば當國二見の浦により。農の

撰れ給ひしもとでの川にて洗ひ

てより。中農羅川とやすあり。

そもそも社は垂仁の御宇に始

めて。中下伊岩根より宮柱太敷き立て。

中日神月神をあがめ申すあり。蛭

子素盞嗚。枝を連ねる御神。高

天の原の昔より（うシテ上明カニ）へうも変らぬ

神徳のそのふぞの方便を。語るも。

いかで盡くさまし。作ぎてもあな

あまりあり。るを裏とおしあへて。

頼めや祈め神の告。木綿四手に榊

菩提の障碍あるべしと。夢よ
まりてやすらへ。かき消すやうに。失せ
てけりかき消すやうに失せてけり。

中入來序

口　半カヽル上
拍子二合ズ

かくて神前に心を澄ますをりふしに

地

俄に大空さえかへり。風雨雷電
肝を消し。六種の震動おびたゞしや

後シテ第六天上　用カ手強ク
大癋

そもそもこれは。佛法を破却する

第六天の魔王とは我が事なり

地

さて又供奉の誰々ぞ。六天よりの煩惱
の惡魔。陰魔。死魔。天子業魔

口

その外從我悟の道を。障礙の
群鬼のさまざまあり。その時解
脱合掌して。その時解脱合掌
して。觀念をおけれバ不思議や

天つ空よりも。孝盞鳴顯れ出で給へり。即ち孝盞鳴顯れ給ひ。即ち孝盞鳴顯れ給へばさしもの猛き。六天なれども恐れをかしてぞ。たゝえたりける。孝盞鳴なほも。怒り給ひ。孝盞鳴なほも。怒り給ひて。寶棒を取り来り。おたんとせしに。飛び違ひ須彌に。上らんとすると。引きとどめ大地に。おち伏せて。怒ち叫ぶ苦をとゝんせ給へば。今よりての上に来るまじと。誓をとゝのせべ。尊は雲居に上らせ給ひ。魔王は通力盡き果てゝ。魔王の通力。盡き果てゝ。虚空に跡なく。失せにけり

# 土蜘蛛

概説　　外九巻ノ二

源頼光病を得て卧蓐しあける處に、或夜深更に及びて異形の僧出で來り、頼光の病を問ふ。何者ぞと尋ぬれば、悩み給ふも我せこが來べき宵なりさゝがにのといへる古歌の意を借りて蜘蛛の精靈なることを暗示し、千筋の糸を出して頼光に打ち掛けゝり。頼光枕頭の膝丸を取りて彼の僧形に斬り附けしに、姿は消えて見えずなりぬ。此物音を聞きて駈けつけたる郎等、仔細を聞きつゝ座中を見れば血痕斑々たるより、痕を尋ねて行く程に塚の前に出でたれば、化生の者の栖なるべしとて、塚を崩しけるに果して葛城山に年經し蜘蛛の精靈現化、遂に之を退治しけり。

此曲凡テサラリト手強ク謡フベシ

小書　入達之傳

| 役別 | | 装束附 |
|---|---|---|
| ツレ | 源頼光 | 風折烏帽子　着附厚板　白大口　腰帯　扇　摺衣 |
| トモ | 頼光従者 | 着附無地厚板　素袍上下　小刀　扇　太刀持 |
| ツレ | 小蝶 | 面連面　髪　髪帯　着附櫛笥　唐織着流 |
| 前シテ | 僧 | 角帽子沙門ニ着　着附厚板　水衣　腰帯　巣持 |
| 前ワキ | 獨武者 | 士烏帽子　着附厚板　摺直垂　白大口　腰帯　小刀　扇 |
| 後シテ | 土蜘 | 面[illegible]　赤頭　鉢巻　着附段厚板　法被　半切　腰帯　打杖 |
| 後ワキ | 獨武者 | 白鉢巻　着附厚板　法被　白大口　腰帯　袴　太刀 |
| ワキツレ | 同従者三人 | 白鉢巻　着附厚板　白大口　腰帯　太刀 |

| 季 | 月 | 曲柄 | 番目 |
|---|---|---|---|
| | 七 | | 五番目（第二番目） |

| 所 | 誓願寺 | 級 |
|---|---|---|
| 前ハ京都源頼光邸<br>後ハ京都北野東南土蜘塚 | | 五 |

次ツレ女　拍子ニ合ヘバ

ヨワク　サラリ

浮きたつ雲の行方とや。浮きたつ雲の行方とや。風のそちを尋ねん

サシ上　拍子ニ合ヘバ

サラリ

これの頼光の所に住へ申す。胡蝶とやすみてい。さても頼光例あらず。悩ませ給へよりの。典薬の頭より御薬と持ち。只今頼光の御所へ

ツチ　グモ

土蜘

作者不詳

まゐり侍るいかに（ヲカヘ）御入りは（トモ男サラリ）誰にて
ぼ座ぬぞ（ツレサラリ）典薬（テンヤク）の頭（カミ）より御（オン）薬を
持ちて胡蝶（トモウケテ）が参りたる由御申しぬ
心得申しぬぼ撮（キゲン）燈を以て（ヒカリ）申し上（ツレ頼光サシ上ヒ用カニ）
げうずるにて侍えかしこ
結ぶ水の泡の。浮世に巡る身にてそ
ありけれ。げにや人知れぬ心の重き



小夜衣の。恨み方もなき袖を。
かたしきわぶる思ひかな（トモ汀サラリ）いかにせし
と。げ作。典薬（テンヤク）の頭（カミ）より御（オン）薬（クスリ）を持ち
て胡蝶（トモ）のまちられて侍（頼光用カニ）此方へ来れと
申しぬへ（トモサラリ）ぬ（ヒカ）つて作。此方へ（ヲカヘ）御参りぬへ
いかに（ツレサラリ）申しとぼげぬ。典薬の頭より御
薬と持ちて参りて侍。御（オン）心ちの何（ナニ）と

御入りぬぞ　頼光カニ　明日より心も弱り
身も苦みて今の朝と待つべかりあり
ツレカル上ニサヤリ　いやいやそれは苦しからず病ふの
苦しき習ひからず療治によりて癒
る事の例は多きの世の中に
頼光カニ　思ひも捨てずば捨てぬぞ　上ニサヤリ　色と盡し
○小絃　て夜晝の色と盡して夜晝の

境も知らぬ有様の時の移るとも
見えぬ程の心かなげにや心を轉ぜ
ずそのまゝて思ひ沈む身の胸を
苦むるとてあるぞ悲しき
シテ僧ニ声上ニ雑カリ　月清き夜半とも見えず雲霧
ツヨク　柏子ニ合ハズ
のかゝれば暮る心かな　イカ気ヲカケ　いかして頼光
御心地は何とぞ　頼光カル上ニサヤリ　不思議や

お祖母も知らぬ傳説の。深更に
ふんでわれを訪ふ。その名のいか
におぼつかな　思ひ（シテ）の作ぶや。悩み
狂ふもわがせてが。求べき宵あり
さてがての　蜘蛛（頼光カ凡上サヅリ）の振舞かねてより。
知らぬといふにたなびく姿の蛛
蛛のぬくなるかかくるやみ條の



糸條に　五體（頼光カ凡上五ニツメ）をつゞめ（シテ）身を苦むる
上ノ用カメニ　化生（シヤウ）をふるよりも。化生（ケシヤウ）見るよ
拍子合
りも。抱（位段々進ミ）にあり。し膝（ヒザ）を。抜き（ヒヨエル）用
きちやうと（ニ）切れだ。そむくる前を
つゞけさまに。見（元入アシ）もたゞず。離（元入ナ）ぎ
使せつ。元入ツ　たりやおうとのこゝる
聲（ト）に。形（ヤ）消えて。失（元入ウ）せにけり。形（ヤ）

消えて失せにけり、中人　平侍門カシテ御聲の高
く聞えゐ狂に詠せまじてゐ。行と
ゆしたる御事にてゐぞ　頼光サマリいくも
早く来る者かな。迎う来り作へ
語つて聞かせゐべ。物語　元ヲ人朗カニさても夜半
ばかりの頃。誰とも知らぬ傷形の
来りわが心地と問ふ。何者ぞと

尋ねしに。わがせてかくべき雪あり
さかりの。蜘のふるまひかねて知る
しもといふ古歌と連ね。即ち七
尺ばかりの蜘とあつて。われは千
條の糸を繰りかけしを。枕にあり
し膝丸にて切り伏せつるが。化生の
者とてかき消すやうに失せ。あり。

（気ヲカヘ）これとすも偏に剱の威徳と思へば。はけみより膝丸を始切とゐづくべし。

（確カリ）あんぼう寺拵なる事にてのあきかワキ（カッテ）言語道断へうに始めぬ君の御威光剱の威徳。かたがたもつてめでたき御事にて。（気ヲカヘ）又御方づけの（アト）迹をゐんへべけりからず血の流れい。



この血をたんだへ。化生の去と退（ケシャウ）（タイ）（ダ）治（ヂ）ちうずるにてい。頼光（サラリ）急いで。

（ワキウケテ）是（ゼ）つて作（ツク）中入早鼓

後ワキ立象（サラリ）一声上（ウ）

（拍子合ハズ）

去も不も。わが大君の困るれば。（ウ）（ウ）（ウ）（ウ）

くかへ鬼のやどりある（ワキ独ノ確カリ）その時独武

去（シャ）進み出でかの塚に向ひ。大音（ダイオン）あげ

てこそやう。これわ音にも聞きつらん

頼光の家にその名を得たる獨
武士。いかなる天魔鬼神ありとも。
命魂を斬たんこの塚と。崩せや
崩せ人々。呼ばわり叫ぶその聲
に。力を得たるばかりあり（上句）
に後ろ武士の。下（上句）
と崩し。ひとかへせば塚の内より火

焔を放ち。水と出すといへども大勢力
崩すや古塚の。怪しき岩間の陰
よりも。鬼神の形。現れたり
後シテ土蜘上ノ手ヲ掛ケ雑カリ
（ノラズ）
（拍子三合ハズ）
女。あらずやわれ昔。葛城山に年を
経し。土蜘の精魂なり。あら恐ずかし
に障とあさんと。頼光に近づきなれ
ば。却つて命を。斬たんとや（上句）その

時独武者進み出で。その時独武者
進み出で。毋を地に伏みあがら君
と悩ますその大將の。鉞にあたつ
て悩むのみかは。命魂を断たんと。
手に手と取り組みもりければ。蜘蛛
の精霊千條の糸と繰りためて。投
げかけ投げかけ白糸の。手足に

縄つり五體をつめて。ゆれ動して
ぞ見えたりける。働キ中手ノ上ノ辺ノ然りとはいへども。
然りとはいへども非国王地の恵と頼み。
かの土蜘と。中に取りてめ大勢乱れ。
かりければ。鉞の光に。忍る亀
色と便に切り伏せ切り伏せ土蜘の。
首打ち落し。喜び勇み。都へとて

てそ。用ゐんヤ帰りけれ二云

## 舎利　概説

外九巻ノ三

出雲國三保の関の僧都に上り、東山泉涌寺に參り、唐土より來朝せる十六羅漢幷に佛舎利を拜して感涙に咽びゐける處に、一人の里人出で來り、共に佛法の有難きこと又舎利の貴きことなど物語りけるが、突如として一天かき曇り凄しき光景となりぬ。こは如何にと思ひゐけるうちに、先の里人は面色變りて鬼神の姿となり、今は何をか包まん其古への足疾鬼が執心なり、佛舎利に心残りて之を奪はん為めに來れるなりとて舎利を奪ひ、天井を蹴破りて虚空に上りけるが、韋駄天現れ、彼の足疾鬼を追跡して打ち伏せ、舎利を取り戻しけり。

此曲前ハサラリト後ハ手強クサラリト謡フベシ

| 役別 | 装束附 | | | |
|---|---|---|---|---|
| ワキ | 僧 | 角帽子 | 着附無地麻斗目 | 茶水衣 腰帯 扇 珠数 |
| 前シテ | 里人 | 面三日月 扇 | 黒頭 | 黒地鉢巻 着附無地麻斗目 水衣 縫紋腰帯 |
| 後シテ | 足疾鬼 | 面蟬 舎利持 | 赤頭 | 赤地鉢巻 着附厚板 法被 赤半切 紋付腰帯 |
| ツレ | 韋駄天 | 面天神 打杖持 | 輪冠 | 黒垂 色鉢巻 着附厚板 白大口 紋付腰帯 |

| 季 | 所 | 曲柄 | 五番目 (景一番目) |
|---|---|---|---|
| 不定 | 京都 東山泉涌寺 | 積吉順 | 五級 |

舎利

世阿彌元清作

ワキ僧詞サラリ

これは出雲の國美保の関より出でたる僧にてはべるなり。まだ都をも見ずはべる程に。この度思ひ立ち洛陽の佛國一見せばやと思ひはべる。道行上サラリ朝たつや。空ゆく雲の美保の関。空ゆく雲の美保の関。心はるばる古里の跡の名殘も

重りて。都にて早く。まきてけり。都に
て早く。まきてけり。日と重ねて急
ぎ問。狂言 都より。まきてい。まづ承
りなびたる東山泉涌寺へ参り。
大唐より渡されたる十六羅漢。
又仏舎利をも拝みやとねじい。
これある寺と泉涌寺と申すげに



い。寺中の人よ委しく案内をも書
ねやし思ひいかん狂言 御入りい
何事と御事ねいぞ これは遥の
田舎よりよりたる僧みていい菊寺の
御事を承り及び遥々参りて候。
大唐より渡りたる十六羅漢。又仏
舎利をも拝み申し度く候 狂言 げに

げに聞しるしあらはれて御身まいれかし。
聊爾に拜み申す事叶はずゝ。但し
今日かの御舍利の御出である日
にてゝわれら當番にて只今戸を
明けヤさんと。鑰を持ちて居り
出で仕。まづその舍利を御拜みあつ
て。その後山門より登りて。十六羅



漢をも拜ませやしんべし。此方へ御
出でゆへ。からかさを御戸を開き
申してゆよくよく御拜みゆへ

ワキ あらあらや御供やしまり仕べし。

ワキサシ上 げにや事さて仕か都の愚か
なるべきなれども。殊更霊験あらたなる
佛舍利と拜み申す事の貴さよ

これなん足疾鬼が奪ひしを。韋駄
天取り返し給ひし。現住奇特の
牙舎利の御相好。感涙肝に銘ずる
ぞや。一心頂禮萬德圓滿釋迦如来

○小謡　上歌　拍子三合

有難や。今も在世の心ちして。今も
在世の心ちして。目のあたりなる佛
舎利を。拝する事のありがたさを何



にたとへん墨染の袖をもぬらす。
氣色かな袖をもぬらす氣色かな。

シテ男上　拍子三合ハズ　ツヨク

有難や佛在世の御時は。法の御聲
を耳にふれ。聞法値遇の結縁に。一
劫をも浮みその身ながら。二世安
樂の心を得るに。後五の時代の今
更に。なほ執心の見佛の縁。嬉し

入ント、かりける。時節（トキ）かな（ワキ詞）われ仏前（ブツゼン）より
縁（クヱン）会（エ）。寒々（レウ）しある物音（フシ）よ。所法（ノリ）と
貴（タツト）む聲（ヱ）すあり。いかある人にてましま
すぞ（シテ問カニ）それは此の寺のあたりよ
住（ス）む者あるか。如（ダヘ）なる法の所（ミ）聲を
受けてそこに立ち寄るばかりあり
より（ワキ）詞（サシ）そもその里。仏（ホトケ）舎利を



拝（ヲガ）まんためあらべ。同じ心ぞ（シテカル上ヲミヅメ）われも旅人（タビビト）
来（ヨワク）るもよそへ（ワキ）。（シテ里人サシリメ）都（ホトリ）の邊
東（トウ）の方（カタ）に続（ツヅ）ける寺（テラ）あれや（ト）
上ヲ月（サシリメ）
○小謡 地ヲ合ズ ○月雪（ツキユキ）の古（フル）き寺（テラ）
き寺（テラ）は水（ミヅ）登（ト）みて庭（ニワ）の松風（カゼ）さえ
心持（ヲモヒ）
かへり。更（フケ）行（ユ）く鐘（カネ）の聲（コヱ）、（シテ別ヲ）までも。心
耳（ミミ）を澄（スマ）す夜（ヨ）もすがら。げに（ト）面（オモ）白（シロ）や

峯の松谷の水音登み渡る山や法
と。唱ふらん山や法と唱ふらん。
クリ上サヲリ
それ佛法あれば世法あり。煩悩あれば
菩提あり。佛あれば衆生もあり。
○サシ曲獨吟
善悪又不二なるべし。然るに後五百
歳の佛法。既に末世の折をえて。
日サカリテ
西天唐土日域より。時至つて久方の。

月の都の山盃にて。佛法流布の志
をとて。佛骨を納め奉り
シテ中サシ用メ
げに目前の光の歌。その御舎
利よりはあらたなる。佛法なり
弥陀仏。佛法なり
弥陀仏。
地と占めて。衆生を救度し給へり。
常住霊山の秋の空。僅に二月

臨んで、魂と消し。泥洹雙樹の音の庭遺跡と聞いて、腸をまつ。有難や佛舎利の。所寺ぞ在世なりける。げにや鷲の峯よも。在世のみぎんにてこそ草木も法の色をえん。皆佛界を得たりしてうしはさもしく凄き。月ばかりこそ昔あれ。松の間に風よそよう白毫の秋の月を禮すとかや。蒼海の波の上に。僅よ四諦の暁の雲を引く空のさびしさぞ。お鷲の峯よ。それ上人ぬ方ぞかし。そはまさで目前の。佛舎利と拜する所寺ぞ。貴かりける。不思議やお御に時れたる

空かき曇り。堂前より輝く電光。
てはそもいかなる事やらん（シテ手強ク）今の
仔とか色むべき。その古の疾鬼が
執心。あほたの人舎利より望あり。詩
し給へやお僧達（ワキサラリ）てはそもゝんれば
不思議やな。面色かはり鬼とありて
（シテ内）（○仕舞）舎利殿よ飽みぬ昔のゆく（ワキ上ミ）金冠をみせ

（シテ）宝座とあがて（ワキ丹）（段々進ンデ）梅檀沈瑞香。梅
檀沈瑞香の。ひて立ちのぼる雲
煙とたて。稲妻の。光に花び紛れ
て。固より。見疾鬼とは。見早き
鬼あれば。舎利殿に花びよりくる
くるくるし。ゝる人の目をくらまして。
其の紛に牙舎利を取つて。天升

を蹴破り虚空よ飛んであがって
ゆくえ行方も知らず。失せて
天中天中天中天中人間
けり行方も知らず失せてけり。中人間

ツレ韋駄天上サラリ
イロエシテ出
早笛ツレ出
拍子三合ハズ

そもそもこれ四。この寺を守護し
奉る。韋駄天とは我がことなり。
よ足疾鬼といふ外道。在世の昔の
執心残つてよしての舎利を取つてゆく。

いづくまでかは追すべき。その牙舎
利。置いて行け。
ツレ後シテ足疾鬼ハ子姿ノ
いや適ふまじ
しよしての仏舎利は。誰も望のある
ものを。
ツレ欲界
欲界色界無色界。働キ上ル
欲界色界無色界。化天耶摩天
他化自在天。二十三天攀ぢ上りて。
帝釋に大まで迫ひあぐれば。梵王

天より出でありひ給ひて。もとの下
界よ。廻つ下す立廻り走り左へ行くも右へ
行くも。前後も天地も塞りて。疾風
風虚空にくるくると。渦巻い廻に
ろと。草弱天立ち寄り寶棒みて。
疾鬼と大地より打ち伏せて。首を
踏まへて舌舎利はいかで。出だせや

出だせとせめられて。あく舎利
と指しこぐれば。草弱天舎利を取
り給へば。さばかり今迄は。早き
鬼のいつしか今は。駕輿車の力も
盡き。心も落ぞと。起きあがりて
てて。失せてけれ

## 小鍛冶　概説

敕使、三條小鍛冶宗近の私宅に下り、御劍を打つべき御命を傳へけるが、相槌を打つ程の者無きに困じ、斯かる大事は神の力を頼む外に途無しと思ひ、其氏の神なる稲荷の社に參りて祈誓をなさんと立出でたる處に、一人の童子宗近を呼止め、必ず御劍の成就すべきこと、和漢に於ける劍の威德などを語り、其時節に到らば來りて汝を助けんと言ひ捨て稲荷山の方に失せぬ。宗近、御劍を打つべき壇を飾り、專念祈誓してあれば、稲荷の神體現れ給ひ、相槌をなし、首尾よく打ち上げて表に小鍛冶宗近、裏に小狐と二つ銘の名劍を得、帝に捧げ奉りけり。

此曲丸ヲ雁カリト謡フト歩ヲ重クナルヲ好マズ習ノ節ハ別ナリ

小書　白頭　黒頭

| 役別 | 装束 | 附 |
|---|---|---|
| ワキツレ | 大臣（橘道成） | 洞烏帽子　着附厚板　赤袖狩衣　白大口　腰帯　扇 |
| ワキ | 三條小鍛冶宗近 | 士烏帽子　着附厚板　掛直垂　白大口　腰帯　扇 |
| 前シテ | 童子 | 面慈童　黒頭　鉢巻　着附縫箔　水衣　腰帯　扇 |
| 後ワキ | 三條小鍛冶宗近 | 風折烏帽子　着附厚板　長絹　白大口　腰帯　扇 |
| 後シテ | 稲荷明神 | 面小飛出　赤頭　狐戴　鉢巻　着附厚板　法被　半切　紋附腰帯　太刀持 |

| 季 | 不定 | 曲柄 | 能切（五番目）能脇畧 |
|---|---|---|---|
| 所 | 京都　三條小鍛冶宗近邸 | 賛吉順 | 五級 |

## 小鍛冶

作者不詳

ワキツレ大臣ハ内サワリ

これは一條の院に仕へ奉る橋の道成にてはさても今宵帝王思議の御告まますにより三條の小鍛冶宗近を召し寄剣を打たせらるべきの勅諚にて候間只今宗近が私宅へと急ぎ候いかにその家の内なる宗

迫があるか（曰宗近閑カニ）宗近とは誰にてわたり
ゐぞ（曰ワレ）これは一條の院の勅使にてあ
るぞとよさてもも帝今夜不思議の
御告まゐらせたより宗近を召し
所劔を打たせらるべきの勅諚か
り急いで仕りゐへ（曰ワキ宣旨）宣旨長つて承
りゐさやうの所劔を仕るべきにはわれ

に劣らぬ者相鎚を仕りてそ。所
劔も成就ゐべけれ。それはかくの御
返事を申しかねたるばかりなり
（曰ワキツレ）げにげにゐかすさろは理あれども。
帝不思議の御告まゐせば。頼も
しく思ひつゐはやはや領承申すべし
（カヽル上ヨリ相手ニ合ズ）と。重ねて宣旨ありければ（相手ニ合）その

上つ方にもかくにも字迦か字迦か進退そこに居りて御劔の双の乱る心なりけりさりながら御改道直ある今の御代なれば若しも奇特のありやせんそれのみ頼む心かなそれのみ頼む心かな

言葉書道新一大事と作せ出されてい

ものかおかやうの御事の神力と頼みやすからでつねじいの某が氏の神の稲荷の明神なれぞそれより直ち荷ち参り祈誓申さべやとねじいシテ童子朝カニ呼掛あうあうあれあるの三條のふ鍛冶宗迦にて御入りいか　ワキ思議やあべてあらざる御事のわが名と

さて宮(ノタマ)はいかなる人にてましま
すぞ シテ朗カニ 雲(クモ)の上(ウヘ)なる帝(ミカド)より劔(ツルギ)もとおち
て来(キ)らせよとぞ仰(オフセ)ありしよなう
ワキ サラリ それぞそれにつけてもあるまじ
き不思議の御事かな。劔(ツルギ)の勅(チヨク)も唯
今なるに早くも召(メ)さるる
事。返(カヘ)すぐ返すも不審(シン)あり

シテ朗カニ げにげに不審はさる事なれども。
われのみ知れば よそ人(ビト)までも
ワキ カル 五ツメ ○小謡 拍子合 人(ヒト)の聲(コヱ)あり シテ地(チ)に響(ヒビ)く 上月(カミツキ) 拍子合 ○謡 雲(クモ)に
耳(ミミ)出(イ)づる物いふ世(ヨ)の中(ナカ)に出(イ)づる物いふ
世の中(ナカ)に隠(カクル)れなき 雲(クモ)
の上(ウヘ)人の所劔(ツルギ)の 光(ヒカリ)は暗(クラ)からん
別 ヲ入 たぶ頼(タノ)めたる君(キミ)の恵(メグミ)によらば所劔(ツルギ)

もあるべかりけるに。適てざるあるべかりけるかの
ざるべき。それ漢王二尺の劔居あ
がら秦の乱を治め。煬帝かげい
（指子三合六）
（九一八）
（ナリ上ニ朗カニ）
の劔。周室の光を奪へり。その後
（金）
玄宗皇帝の鐘馗たるも。劔の徳
て魂魄へ。君邊に仕へなり。魍魎
（キ九）
鬼神に至るまで。劔の双の光て
（ニ）

○サン曲獨吟

恐れてその寇をあす事を得ず
（甲）
漢家本朝に於いて。劔の威徳
（シテ中朝カニ）
申すべ及ばぬ。寄特とかや。又我
が弧のそのもづめ。人皇十二代。景
行天皇。詔の御名をば日本武とや
ゞ。カ東夷を退治の勅を受け。
（九）
開の東も遥なる。東の猿の道

すがら。伊勢や尾張の海面にて立つ波までも。帰る事よと羨み。いつかわれも帰る波の。袂手にあらめやと。思ひつゞけて行くほどに

シテ上ノ朗ニ

そゝやかゝての弟にて。月ノ上ノ人ニ馬巌窟に身を砕き。血は涙鹿の川とあつて。紅波楯流し数度に及べる夷も兜

を脱いで弓を捨て。皆降参を申しけり。尊の御宇より帝将場を始め弥〳〵頃の神亥月。二十日餘の事なれば。四方の紅葉もみぢ枯の遠山にあらぬ雪を。眺めさせ給ひしに

シテ上ノ朗ニ

夷四方を圍みつ。枯野の草に火をかけ。

○仕舞

餘焔頻よ燃えよかり。敵攻鼓をおちかけて。火焔を放ちてかくりければ。尊の劔を抜いて尊の劔を抜いて尊の劔を抜いて。ぬ雑ぎを抜いてあたりと拂ひ。忽ちて失もたちち退けし。四方のまもと。ぬ雑ぎ拂へべ。劔の精霊龍となつて。焔もなるも。吹きい返されて。天に輝き



地に充ち滿ちて。猛火の却つて敵を焼けべ。数萬騎の兵どもは忽ちてしてしてしまひ。その後。四海治りて人家戸ごとを忘れ。もその草雑の故とかや。唯今。海がおつべきその瑞相の序劔もいかでそれにの劣るべき。伝ある家の字近

よ心安くも思ひて下向し給へ。
ワキ 漢家本朝に於いて劔の威徳時に取つての猛言なりさてさて御身のいかなる人ぞ シテ より誰とても乞ひ頼めまづまづ物の御劔をおつぐき壇を飾りつ その時われと侍ち給つぶ 拍子三合 通力の身と変じ。通力の身と変じて。必ずその時節に参り食ひて御力をつけ申すべし侍ち給へと。タツ雲の猶若行方も知らず失せにけり行方も知らず失せにけり 中間
ワキ上 用カニ朗カニ 拍子三合六 字句に物に随つて。即ち壇にあがりつ。不浄を隔つる七重の注連四方に本尊をかけ奉り。幣帛と捧

身と変じて。必ずその時節に参り食ひて御力をつけ申すべし侍ち給へと。タツ雲の猶若行方も知らず失せにけり行方も知らず失せにけり 中間
ワキ上 用カニ朗カニ 拍子三合六 字句に物に随つて。即ち壇にあがりつ。不浄を隔つる七重の注連四方に本尊をかけ奉り。幣帛と捧

げ。仰ぎ願つくは。字迦時に至つて。
人皇六十六代。一條の院の御宇に。
その職の誓と夢ること。これ
私の力にあらず。伊勢諸伊勢
冊の。天の浮橋と踏みわたり。豊
葦原と探り給ひし。御系より
始まれり。その後南瞻僧伽陀國



波斯弥陀童尊者よりこの方。天竺國
ひつきの子孫に傳へて今に至れり。
[illegible]は。字迦私の切
名にあらず。音天竺の勅命に
よれり。まあらべ十方恒沙の誘
神。唯今の字迦に力を合せて
たび給へとて。幣帛を捧げつ。

天にあがめ頭を地につけ。骨髄の丹誠
聞きいれ納受せしめ給へや　謹上再拝（殷々進ンデ）

地上（ハル早笛ヲ上）いかにや宇近勅の劔。いかにや宇
近勅の劔。打つべき時節の虚空
にあれり。頼めや頼めたのめ（働ク上）

後ニ稲荷明神中ヲシ祈ヘ　童男壇の上にあがり、童男壇の
上にあがつて。宇近に二拝の膝を

（位進ミ）

屈し。さて所劔の。鐵ぬき、問へば。
宇近も忍ぶの心をさとして
鐵取りなし。敵の鎚と。はつたと
打てべちやうと。打つ　（同進ンデ）ちやうちやう
やうちやうと。打ち重ねたる鎚の
音。天地に響きて。あびたるしや（上）

（半同サヲリ）かくて所劔をおちなり。表にお鍛

○仕舞

治宗迫と打つ。神體は、守護おれば。お狐と裏にあざやかよ。上臈は、持ちなる所劔の、双つ雲と乱れたれば。天の村雲ともそれあれや。天下爭一の。天下爭一の。二つ銘の所劔にて。四海と治めた上、五穀成就もこの時なれや。即ち此の所の狐。



稲荷の神體お狐と。勅使に捧げ申し。これまでなりといひ捨て。スむら雲に花びら爭り。群雲に飛び爭りて東山。稲荷の峯にぞ帰りける。

# 石橋　概説　外九卷ノ五

寂昭法師唐土に渡り、青涼山にて一つの石橋あるを見、折から來かゝりたる樵童に橋の由來を問ひ、始めて名に高き石橋なることを知り、生死とも佛の力にまかせて此橋を渡らんと一けるが、樵童之を止めて古來渡橋の容易ならざる由を告げ、且つ此橋は自然に出で來一ものなること、橋の彼方は文殊の淨土なることなど語りて失せ一が、やゝありて文殊の愛せる獅子出現一、咲き匂ふ牡丹の花に狂ひ戯れ、御代の萬歳千秋をことほぎて止みけり。

小書　大獅子　師資拾二段

| 役別 | 装束附 |
|---|---|
| ワキ　寂照法師 | 金鍍角帽子　着附白綾　紫水衣　白大口　袴絡　白腰帯　扇　水晶珠数 |
| 前シテ　童子 | 面慈童　黒頭　黒地鉢巻　着附縫箔　水衣　縫入腰帯　童子扇 |
| 後シテ　獅子 | 面獅子口　赤頭　赤地金鍍鉢巻　着附段厚板　赤地半切　法被　腰帯 |

| 季 | 所 |
|---|---|
| 四月 | 唐土青涼山石橋 |

曲柄　替古順

五番目　最高等ノ部級　一

# 石橋

作者不詳

日本僧白

「それ大江の定基といひしは寂照法師なり。はじめて唐渡天し、始めて彼方に方を拜み廻り、唯今清涼山よ来たれば、これなる石橋とかや。橋にてあり。けにけに皆人を待ち受くと尋ねその橋を渡らんとやおもふ」

シテ童子上ヒ「松風の花

と新よ吹き添へて。雪をも運ぶ路
かな　山路よ日暮れぬ樵歌牧笛の聲。
人間萬事横々の。世を渡り行く身
の有様。物毎に遮る眼の前。光の陰
とや送るらん　餘りて山を遠くきて
雲又跡と立ち隔て　入りつる方も
白波の。入りつる方も白波の。谷の



川音。雨とのみ聞えて松の風も亂
けや誤つて半日の客居しも。今
身のよたて。知られたり今身のよた知ら
れたり　如何にされある人は寿ぬべき
事のか　何事と御尋ねいそ　されある
へ帰りなひたる石橋ゐていか　さんは
これそそ石橋にて作。向ひは文殊の

浄土清涼山よりくまく御拝みゐへ
さて（ワキ）石橋にて仏ひけるそやさあらハ
身命を佛力にまかせてこの橋を渡ら
へやと思ひゐ（シテ）詣くゐそのかみゐを得
給ひ高僧達も雖行苦行捨身の
行にてこにて日日を送りてそ。
橋とハ渡り給ひ（カヽル上ニ）獅子ハ虫を喰へ



ん（ト）とても。まつ勢をなすとそき
け。我か法力のあれかとて。行く事雖
き石の橋とたやすく（ト）思ひ（ト）渡らんとや。
あら危しの御事や（ヨキカヽリニ）獅子を向けい有
雖やたゝ寿常の行人ハ左右なう渡
らぬ橋よあう（シテ）歌ゐへこの龍波の。
雲より落ちて数千丈。龍壺まてハ

霧深うして。身の毛もよだつ谷深み
巖（ワキカル上）々たる岩石に（シテ）僅にかゝる石の
橋（ワキ）苔は滑りて足もたまらず
（シテ）渡れい目も昏れ（ワキ）心もそら（上ノ同）上の空
なる石の橋。（前）空なる石の橋。まつ（ト）
（元）覺せよ橋もとは。歩み臨めばこの橋
の。（中）面は天にも足（ト）（元）らずして。下へ泥梨



（ト）も白波の。（元）虚空を渡る如くあり。（ト）（ウ）
危しや目もくれ心（元クリ）も（ナ）消え消え（ト）
とあり（ウ）けり。（キ）あほろけの行人へ。
思もよらぬ御事（ワキ）（ツ）あほなほ橋の
所謂御物語り（キ）（クリ地上ニ）それ天地開闢
のこの方。雨霧を降して國土を渡
る。それ即ち天の（ト）（ウ）浮橋もいへり（ト）

シテサシ上

その外国土世界に於いて、橋の名前、さまざまにして、水波の難と遁れ、萬民富める安と渡るも、即ち橋の徳とかや。されば、その石橋とやすい人間の渡せる橋よあらず。おのれと出現して、つけるの石の橋あれば石橋と名をつけたり。その面僅



よ。人よりは狭うして、苔はあはだ滑なり。其長さ三丈餘。谷のそこへ深き事、千丈餘に及べり。上には滝の糸。雲より懸りて、下は泥梨も白波の音は岸に響き合ひて、山河震動し、雨つちくれと動かせり。橋の氣色と云へ渡せば、雲に

聳ゆる峰ひの。たゞへ夕陽の雨の
後よ虹となせる姿又弓を引ける
形なり。シテ上道よ臨んで谷をゝれい。
足冷しく肝消えゝ進んで渡る人も
あり。神変佛力にあらずゝ誰かこの
橋を渡るべき。向は文殊の浄土にて
常ふ生徒の紀降りて。笙笛琴



笠篌々々の雲に聞えき目前の奇
特あらたなり。暫く待たせ給へや。
影向の時節も久う経ぬるも過きし夫
獅子上獅子上獅子の團扇の舞楽のみきん。獅子
團扇旋の舞楽のみきん。牡丹の美
しきまひ立ち満ちたりきんの獅
子頭。おてや雅せや牡丹芳牡丹芳。

黄金の蘂現れて。花に戯れ枝に従
し轉ひ。けみも上あき獅子王の勢
靡かぬ草木も時あれや。万歳子
秋と葬ひ納め。萬歳子秋と葬ひ
納めて。獅子の座みてそ直りけれ

大正九年十月拾日印刷
同　年十月十五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町東北角　檜常之助

發行所　東京市神田區錦町一丁目拾番地　檜大瓜

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂

藩謡作製所
所權不許

終